

学術論文

保育の表現技術（音楽）の指導法についての研究 — ピアノ演奏 —

夏目 佳子

A Study of Teaching Method for Expressing Technology for Music in Early Childhood Education — Piano Performance —

NATSUME Yoshiko

1. はじめに

本学の1学年の前期に開講される音楽の授業では、ピアノ演奏、音楽理論、歌唱の3つの指導が行われる。実際の授業では、1回の授業を前半後半に分け、毎回の授業で行われるピアノ演奏の指導の時間と、音楽理論指導と歌唱指導の時間にあてるという学習方法をとっている。前半がピアノ演奏の指導の時間であった学生は、後半は音楽理論指導と歌唱指導の時間になり、前半が音楽理論指導と歌唱指導の時間であった学生は、後半はピアノ演奏の指導の時間になる。そして、音楽理論指導と歌唱指導は、毎回の授業で両方の指導が行われるのではなく、それぞれの授業回数があらかじめ決められている。したがって、学生は1回の授業で2つの内容の表現技術を習得していく。

本論文では、3つの指導の中のピアノ演奏の指導に焦点をあて、音楽の半期の授業を通して、学生たちのピアノ演奏に関する意識がどのように変化したか、学生たちがどのような内容を学習したのか、筆者のピアノ指導の効果がどうであったのか等を明らかにし、どのような学習効果があったのかを検討していく。

また、本学には、ピアノ演奏に関し、さまざまな学習歴の学生がいる。子どもの頃からピアノを学習している学生もいるが、入学後ピアノを初めて演奏する学生や、入学が決定し授業が開講される前にピアノを学習し始める学生もいる。学生たちのピアノの学習歴が各々異なっているため、授業による学習効果の現れ方も異なっていると考えられる。このことから、ピアノの学習歴の違いが、学習効果にどのような影響を与えるのかも、明らかにしていく。

そこで、本研究では、筆者がピアノ演奏の指導の中で重要としている内容に焦点をあて、音楽の授業のピアノ演奏の指導を通して、学習者が、どのような意識の変化をしたのか、学びの方法をどのように変化させたかという学習効果を、質問紙調査とピアノ演奏の指導内容により

明らかにする。そして、明らかになった学習効果から、学生のピアノ経験にそった効率のよいピアノの学習方法を見つけ出し、より効果的な指導法に結びつけていきたい。

2. ピアノ演奏の授業の流れ

音楽のピアノ演奏の授業の流れは以下のようなものである。課題曲として、バイエルの練習曲と弾き歌いのピアノ伴奏曲の2つを基本として用いる。授業は、学生のこれまでのピアノ学習歴を考慮して、初級者、中級者、上級者の3つのグループに分け、それぞれのグループレベルにしたがった個人レッスンで指導する。また、ピアノ演奏の1回の授業の中で、実技指導のレッスンを2度行うようにしている。そして、実技指導のレッスン以外のピアノの時間は、各自個人でピアノの練習を行う。したがって、ピアノレッスンの基本的な流れは、①個人練習→個人レッスン→個人練習→個人レッスンと、②個人レッスン→個人練習→個人レッスン→個人練習の2つの流れとなる。各個人は、授業日によって①と②のどちらかのパターンとなる。1回の授業の中に2度のレッスンがあるため、1度目のレッスンで指導した点を個人練習で習得し、2度目のレッスンでは正しく演奏できる場合がある。個人レッスンと個人練習を2度繰り返すことで、授業時間の中で指導点をすばやく練習し習得できることが可能となり、より内容のある効果的なピアノ指導が行えると考えている。

3. 質問紙調査による検討

3. 1 質問紙調査の目的

筆者は、学生たちがピアノ演奏を効率よく学習できるような指導を心がけ、実施している。ピアノ演奏の指導において多くの重要な指導項目があるが、音楽の授業では、その中から特に12の項目に重点を置いてピアノ演奏の指導を行っている。

そこで、学生たちがピアノ学習を進める中で、筆者の指導した内容が反映され、ピアノ演奏する際に指導内容を意識し演奏できていることを期待し、重点12項目の内容につき、学生たちはどのように意識しピアノ演奏しているのか質問紙調査を行った。具体的には、ピアノ指導を行う授業の最終日に質問紙調査を行い、授業の初めの頃と授業を終えた時点を比べて、ピアノ演奏時に重点12項目について、どのような意識で演奏し、どこに注意をして演奏しているのかを調査した。調査結果から、授業の開講時の頃と授業を終了した時点での違いを明らかにする。

3. 2 被験者

音楽の授業で、筆者がピアノ指導を行った学生、30名を質問紙調査の対象とした。

音楽の初回の授業で、学生を初級者、中級者、上級者の3つのグループに、これまでのピアノなどの鍵盤楽器の学習歴や学習してきた内容、本人の希望等を考慮し、グループ分けをした。初級者は、ピアノ学習経験がないもしくは短い学生のグループで、16名であった。中級者は、

ある程度の期間鍵盤楽器の指導を受けたことのあるもしくは現在も指導を受けている学生で構成するピアノ学習経験がある学生のグループで、8名であった。上級者は、鍵盤楽器の指導を10年以上受けたことがある学生で構成するピアノ学習経験の長い学生のグループで、6名であった。

調査は、2017年度入学の1年生を対象とした。

3. 3 調査方法

ピアノ演奏の指導をしていく中で重要になる指導点12項目について、授業の始まった頃と授業終了時を比較し、ピアノ学習を続けていく中で、学生たちの指導点に関する意識がどのように変化したのか、また、どのくらい指導点を意識して演奏していたのかを明らかにする質問紙を作成した。

質問の12項目は、以下の内容である。「1. 正しい音で演奏する。」、「2. 正しいリズムで演奏する。」、「3. 正しい指使いで演奏する。」、「4. 正しい鍵盤の位置で演奏する。」、「5. 曲の最後の部分の音の長さ、もしくは休符の長さを正しく演奏する。」、「6. 曲の途中の休符を正しく演奏する。」、「7. 正しい強弱記号で演奏する。」、「8. 調号を確認し、正しく演奏する。」、「9. 左右の音のバランスに気をつけて演奏する。」、「10. ト音記号、ヘ音記号を正しく演奏する。」、「11. 臨時記号を正しく演奏する。」、「12. 正しいテンポで演奏する。」。

これらは、筆者が音楽の授業で特に意識して指導している項目である。これらの項目について、音楽の授業の開講時の頃と音楽の授業の終了時点において、ピアノ演奏時にどの程度意識し注意しているかを1から5の5段階評価の中から、該当する箇所1箇所に○を書いて回答してもらった。5段階評価においては、1は「全くできていない」、2は「あまりできていない」、3は「どちらともいえない」、4は「少しできている」、5は「良くできている」、とした。それぞれの質問項目につき、各グループの平均値を求めて、検討する。

授業では、バイエルの練習曲と弾き歌いのピアノ伴奏曲の2つのピアノ演奏の指導をするが、本研究では、ピアノ演奏が主となるバイエルの練習曲のピアノ演奏についてのみ調査した。調査は、2017年7月に行った。

3. 4 結果

質問紙調査の結果は、以下の3. 4. 1から3. 4. 4のようになった。

質問紙調査の結果を検討する中で、初級者グループは、ピアノ学習経験の有無によって特徴が異なることがわかったため、初級者グループを本学入学前にピアノ学習経験のない初級者1グループと本学入学前から習い始めたピアノ学習経験の短い初級者2グループに分けて結果を整理した。また、ピアノ学習経験はあるが初級者グループを希望した学生は、初級者2グループに含めた。初級者グループを2つに分けたのは、初級者であっても、ピアノの指導を受けたことが有る場合は、指導を受けたことが無い場合に比べ、ピアノを演奏する知識が有り重要な

注意点を少なからず理解していると判断できるからである。

初級者1グループの学生数は11名で、初級者2グループの学生数は5名であった。

3. 4. 1 初級者1グループの結果

図1は、初級者1グループの回答結果である。

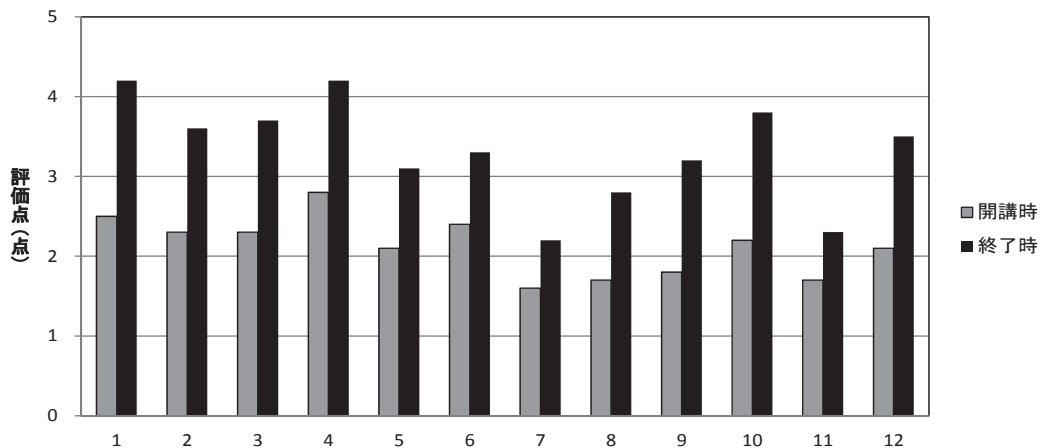


図1 初級者1グループの評価点

初級者1グループは、本学入学前にピアノ学習経験のない学生のグループで、学生数は11名である。縦軸がグループ平均の評価点で、横軸に質問の12項目が置いてある。図中の灰色のグラフが音楽の授業の開講時の評価結果で、黒色のグラフが音楽の授業の終了時の評価結果である。これらのグラフの構造は、3. 4のすべての図に共通である。

図1から12項目すべてにおいて、音楽の授業の開講時より終了時の方が、評価点は高くなっていた。授業を受けピアノ演奏の指導を受けることで、ピアノ演奏に必要な注意点をより意識して演奏するようになっている。特に、「1. 正しい音で演奏する。」は評価点が1.7点増加し、12項目のうちで、意識が一番高まっている。次に評価点の増加が多いのは、評価点が1.6点増加した「10. ト音記号、ヘ音記号を正しく演奏する。」である。また、「3. 正しい指使いで演奏する。」、「4. 正しい鍵盤の位置で演奏する。」、「9. 左右の音のバランスに気をつけて演奏する。」、「12. 正しいテンポで演奏する。」の4項目においては、評価点が1.4点多くなった。評価が1ランク向上する評価点が1点以上増加した項目は9項目で、上記以外では、「2. 正しいリズムで演奏する。」、「5. 曲の最後の部分の音の長さ、もしくは休符の長さを正しく演奏する。」、「8. 調号を確認し、正しく演奏する。」であった。半期のピアノ演奏指導により多くの項目で評価点が高くなったのは、ピアノ演奏の指導を初めて受けることに加え、細やかな指導の結果であると思われる。指導者が繰り返し細やかな指導をすることで、音を正しく演奏するだけで

なく、多くの知識を習得しながら学習できることが明らかになった。

指導している中での初級者1グループの演奏の変化は、「1. 正しい音で演奏する。」という意識が高まりこの点に注意して演奏することで、楽曲を仕上げるのがはやくなったことである。また、ピアノ学習を初めて行う時から、指導者が細やかな指導をすることにより、注意点に気をつけながらピアノ学習をすることができ、その結果注意点に対する意識が効率的に高まっているようである。

3. 4. 2 初級者2グループの結果

図2は、初級者2グループの回答結果である。初級者2グループは、ピアノを習ったことがある初級者の学生と本学入学前から習い始めた学生で構成されたピアノ学習経験のある初級者のグループである。学生数は5名である。縦軸がグループ平均の評価点である。

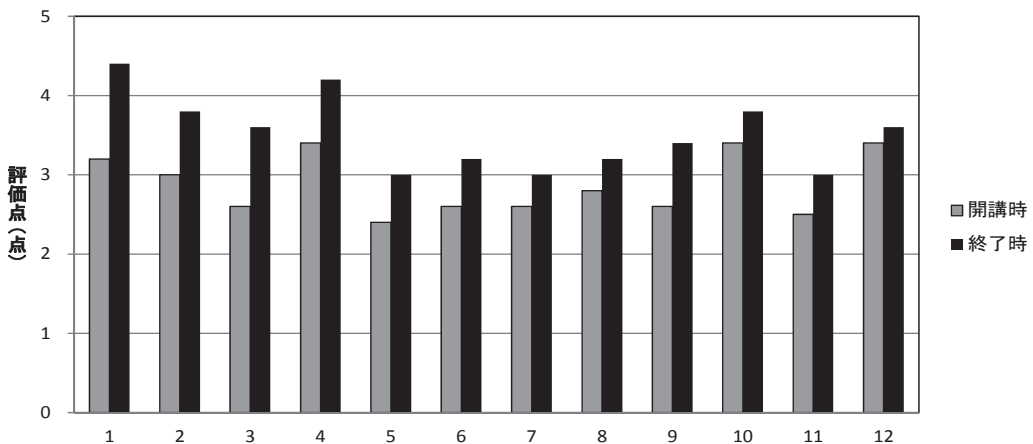


図2 初級者2グループの評価点

12項目の質問すべてにおいて、音楽の授業の開講時より終了時の方が、評価点は多くなっていた。特に、「1. 正しい音で演奏する。」は1.2点評価が高くなり、「3. 正しい指使いで演奏する。」においては1.0点評価が高くなった。評価が半期の授業で1ランク向上したのは、この2項目である。また、「2. 正しいリズムで演奏する。」「4. 正しい鍵盤の位置で演奏する。」「9. 左右の音のバランスに気をつけて演奏する。」の3項目は0.8点評価が高まった。これらの5つの項目は、他の項目より評価点増加が多くなっていた。繰り返し細やかな指導をすることで、初級者2グループにおいても、注意項目に対する意識が向上していることが明らかになった。

指導している中での初級者2グループの演奏の変化は、「1. 正しい音で演奏する。」ことや「3. 正しい指使いで演奏する。」ことの意識が高まり、これらの点に注意してピアノ演奏すること

で、指使いの大切さを理解しながら演奏できるようになったことである。正しい指使いで正しい音を演奏することで曲の流れがスムーズになっていった。

3. 4. 3 中級者グループの結果

図3は、中級者グループの結果である。中級者は、ある程度の期間鍵盤楽器の指導を受けたことのあるもしくは現在指導を受けている学生で構成されたピアノ学習経験がある学生のグループで、人数は8名であった。縦軸がグループ平均の評価点である。

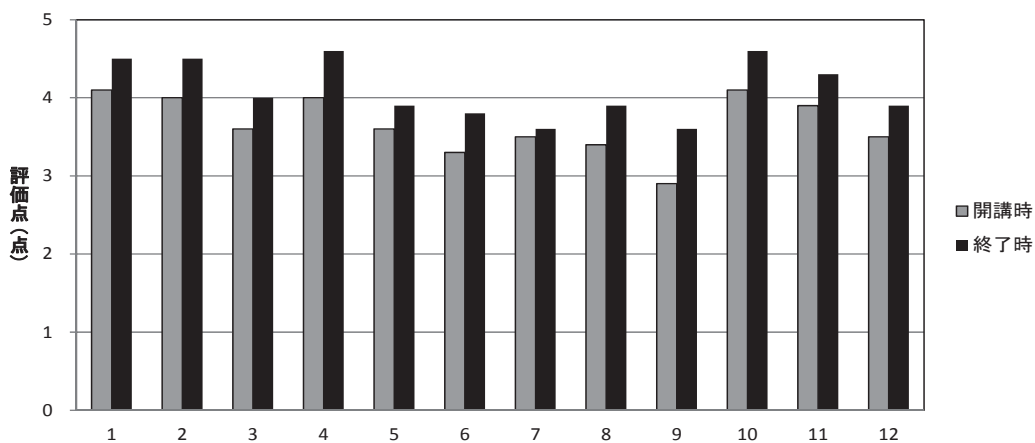


図3 中級者グループの評価点

中級者グループでは、12項目のすべてで、音楽の授業の開講時より終了時の方が、評価点は高くなっていた。注意項目に対する意識が高まりより注意してピアノ演奏するようになったと思われる。評価点が最も高くなった項目は、「9. 左右の音のバランスに気をつけて演奏する。」で0.7点高くなった。次に評価点が高くなったのは「4. 正しい鍵盤の位置で演奏する。」で0.6点増加した。「2. 正しいリズムで演奏する。」、「6. 曲の途中の休符を正しく演奏する。」、「8. 調号を確認し、正しく演奏する。」、「10. ト音記号、ヘ音記号を正しく演奏する。」の項目では0.5点向上した。12項目のうち、評価点の増加が多かった6項目において、増加は0.5から0.7点で、1点を超える評価点の増加はなかった。中級者グループの学生は、もともと演奏の知識をある程度持っているので、初級者グループの学生にくらべ多くの注意項目を意識し注意しながら演奏できる場合が多い。したがって、音楽の授業の受講前後での評価点増加はあまり多くはないが、それでもすべての項目で評価点は増加していた。中級者グループにおいても、注意点に関する細やかな指導を繰り返すことが有効であったと考えられる。

指導している中での中級者グループの演奏の変化は、「9. 左右の音のバランスに気をつけて演奏する。」意識が高まったことである。旋律と伴奏等の音楽的な表現と合わせて指導するこ

とで、楽曲の仕上がりがはやくなり、表現力のある演奏ができるようになっていった。また、「4. 正しい鍵盤の位置で演奏する。」に関しては、実際に演奏する鍵盤の位置に意識が十分に行き届かず、楽曲の冒頭で演奏音の高さの位置を間違えて演奏してしまう楽曲があったが、演奏する前に鍵盤の位置を確認することを繰り返し指導することによって、鍵盤の位置を確認する余裕を持って演奏できるようになった。

3. 4. 4 上級者グループの結果

図4は、上級者グループの結果である。上級者は、10年以上の長期間のピアノ学習経験がある学生のグループで、人数は6名であった。縦軸がグループ平均の評価点である。

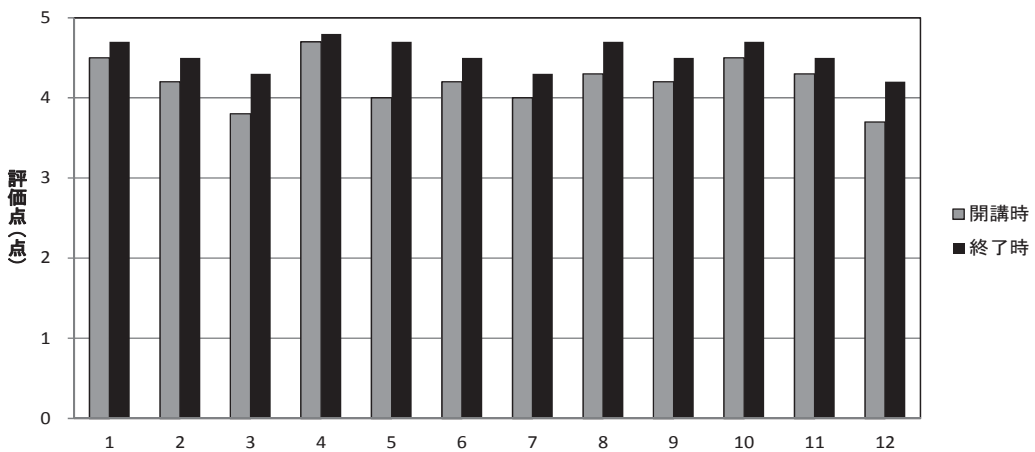


図4 上級者グループの評価点

上級者グループでは、音楽の授業の講義が始まった時から、12個の注意項目のうち10項目において4以上の評価点で、注意項目に対して高い意識を持って注意してピアノ演奏していることがわかる。さらに、授業を積み重ねることにより、12項目すべてにおいて、音楽の授業の終了時に評価点数が上がっている。これらの事から、上級者グループの学生は音楽の授業の開講以前から12の注意項目を意識してピアノ演奏しているが、音楽の授業のピアノ指導を受けることで、12の注意項目をより意識し、より注意しながら演奏する能力が向上したことがわかる。注意項目に関する繰り返しの細やかな指導は、上級者グループにおいても有効であった。

特に評価が上がった項目は、「5. 曲の最後の部分の音の長さ、もしくは休符の長さを正しく演奏する。」で、評価点が0.7点増加した。曲の最後の部分では、音の長さが短くなったり、休符がなくなったりと、曲の途中では正確に演奏できる音や休符の長さが、正確に演奏できないことが多い。筆者は、この部分を、意識して細かく指導しているので、項目

5の評価点が向上したことは、指導の成果があったと考えている。

また、次に評価点が多く増加したのは、「3. 正しい指使いで演奏する。」と「12. 正しいテンポで演奏する。」の2つの項目で、評価点が0.5点増加した。演奏する曲が難しくなると、自分の演奏しやすい指使いで演奏する場合や、演奏しやすい箇所と演奏しにくい箇所において異なったテンポで演奏してしまう場合が起こりやすい。項目3と12の講義終了時の評価点が増加したことは、これらの注意点を十分に意識し注意して演奏するようになったと考えられる。この2項目に関しても、筆者は細やかな繰り返しの指導を心掛けている。上級者グループでは重要な指導項目であると思われる。

指導している中での上級者グループの演奏の変化は、「5. 曲の最後の部分の音の長さ、もしくはは休符の長さを正しく演奏する。」意識が高まったことである。この項目は、筆者が重点を置いて指導している点である。上述したが、ピアノ学習経験が長い上級者グループにおいても、楽曲の最後の音の長さや休符の長さを正確に演奏できていないことが多いからである。楽曲の最後まで丁寧に演奏する意識と音の長さや休符の長さを正確に演奏する意識を丁寧に繰り返し指導することで、曲の最後の部分の音の長さや休符の長さを意識して正しく演奏することができ、楽曲の仕上げを向上させることができるようになった。演奏が終わるという安心感から、音や休符の長さをいい加減に演奏してしまうことを軽減することができた。筆者がこの項目に重点を置いて指導するのは、楽曲の最後まで丁寧に正しく演奏して、初めて完成度の高い演奏ができたと考えるからである。上級者グループには、このレベルまで期待をしたい。

3. 5 初級者グループ、中級者グループ、上級者グループの比較検討

各グループの評価点結果と特徴については、3. 4で明らかにした。3. 5では、初級者1グループ、初級者2グループ、中級者グループ、上級者グループの評価点結果を比較検討し、特徴を明らかにする。

3. 5. 1 音楽の授業の講義開始時の評価点比較

図5は、初級者1グループ、初級者2グループ、中級者グループ、上級者グループの音楽の授業の開講時の評価結果を比較した図である。縦軸がグループ平均の評価点で、横軸に質問12項目が置いてある。それぞれの項目の評価点は、各グループの平均値である。図中の各項目の4本のグラフは、左から初級者1グループ、初級者2グループ、中級者グループ、上級者グループのグループ平均の評価点のグラフである。これらのグラフの構造は、3. 5. 1と3. 5. 2の図に共通である。

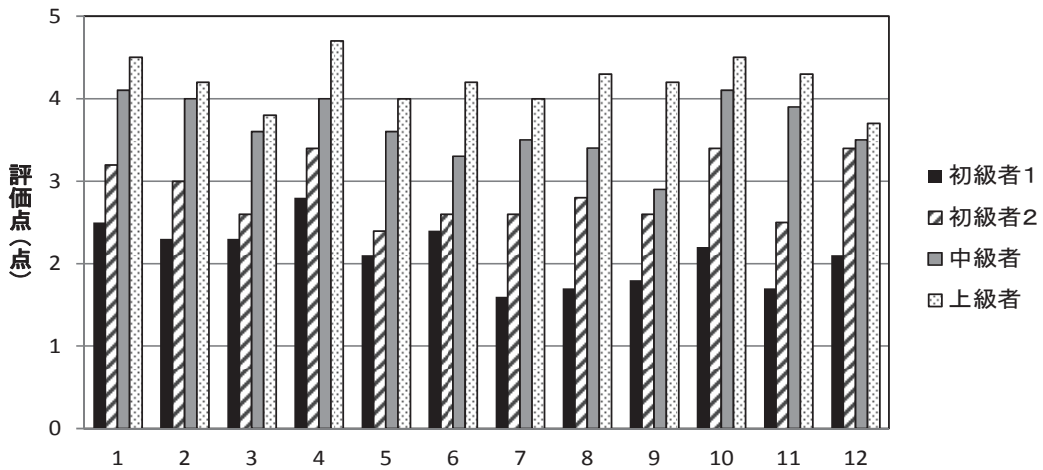


図5 音楽の授業の講義開講時の評価点

12項目すべてにおいて、初級者1グループの評価点が一番少なく、上級者グループの評価点が一番多かった。そしてすべての項目で、評価点は、初級者1グループ<初級者2グループ<中級者グループ<上級者グループとなっている。評価点は、各項目に対する意識の高さを表している。したがって、初級者1グループの意識が一番弱く、初級者2グループ、中級者グループと意識が強くなり、上級者グループの意識が一番強くなっている。上級者になるほど、12項目全般をよく意識して演奏していることが分かる。

12項目の中で、上級者グループの評価点と中級者グループの評価点との差が最も大きいのは、「9. 左右の音のバランスに気をつけて演奏する。」であった。上級者になるほど、曲の完成度に関する内容を意識しながら注意して演奏できるようになっていることが分かるとともに、この項目9について中級者は上級者ほどには意識できていないことが分かった。

3. 5. 2 音楽の授業の講義終了時の評価点の比較検討

図6は、初級者1グループ、初級者2グループ、中級者グループ、上級者グループの音楽の授業の講義終了時の評価結果を比較した図である。それぞれの項目の評価点は、各グループの平均値である。

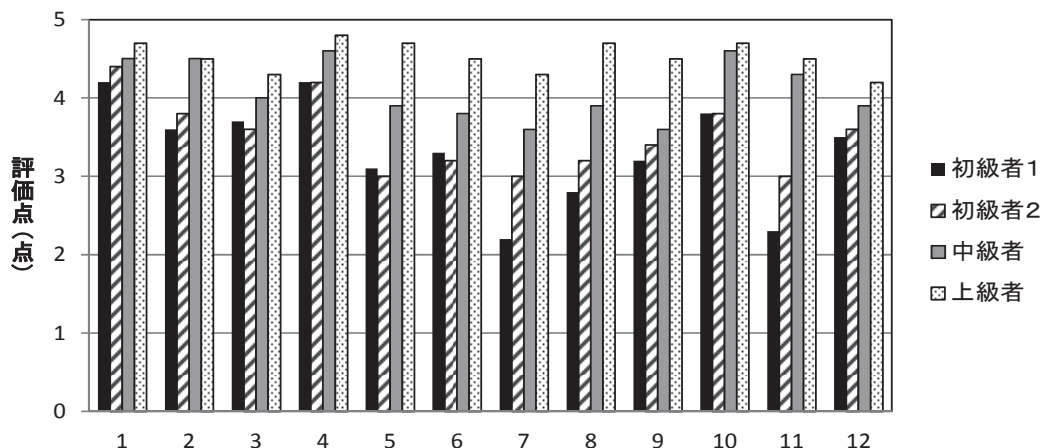


図6 音楽の授業の講義終了時の評価点

図6の結果から、4つのグループの評価点は3つのパターンに分けることができる。

一つ目のパターンは、評価点が、初級者1グループ<初級者2グループ<中級者グループ<上級者グループと、ピアノ学習経験が長いほど評価点が多くなっているパターンである。「1. 正しい音で演奏する。」、「7. 正しい強弱記号で演奏する。」、「8. 調号を確認し、正しく演奏する。」、「9. 左右の音のバランスに気をつけて演奏する。」、「11. 臨時記号を正しく演奏する。」、「12. 正しいテンポで演奏する。」の6項目が、このパターンである。初級者グループから上級者グループになるにしたがって、これらの項目に対する意識が強くなっている。

二つ目のパターンは、初級者1グループと初級者2グループの評価点が同じもしくはほぼ同じパターンである。「3. 正しい指使いで演奏する。」、「4. 正しい鍵盤の位置で演奏する。」、「5. 曲の最後の部分の音の長さ、もしくは休符の長さを正しく演奏する。」、「6. 曲の途中の休符を正しく演奏する。」、「10. ト音記号、ヘ音記号を正しく演奏する。」の5項目が、このパターンである。半期の授業と練習の結果、これらの項目に対する初級者1グループの意識が初級者2グループの意識レベルに近づいてきている。

三つ目のパターンは、中級者グループと上級者グループの評価点がほぼ同程度のパターンである。「2. 正しいリズムで演奏する。」、「10. ト音記号、ヘ音記号を正しく演奏する。」の2項目が、このパターンである。半期の授業と練習により、中級者グループと上級者グループのこれらの項目に対する意識レベルは、ほぼ同程度になっていることがわかった。

3. 5. 3 音楽の授業の開講時と終了時の評価点の差の比較

半期の授業と練習により、学生はピアノ演奏能力を向上させ、12の注意項目に対する意識も強くなっている。音楽の授業の終了時の各グループの平均評価点から開講時の各グループの平

均評価点をひいた各グループの平均評価点の差を比較検討することで、この点を明らかにする。

図1から図4の結果から、すべてのグループとすべての項目において、グループ平均評価点は講義終了時に講義開始時より高くなっている。したがって、講義終了時の各グループの平均評価点から講義開始時の各グループの平均評価点をひいた各グループの平均評価点の差は、正の値となる。そこで、講義終了時と開始時の各グループの平均評価点の差を、「評価点増加」とこれ以後表記する。

図7は、初級者1グループ、初級者2グループ、中級者グループ、上級者グループの音楽の授業の評価点増加を比較した図である。縦軸がグループの評価点増加で、横軸に質問12項目が置いてある。図中の各項目における4本のグラフは、左から初級者1グループ、初級者2グループ、中級者グループ、上級者グループの評価点増加のグラフである。評価点増加は、各項目における半期での意識の向上分に相当している。

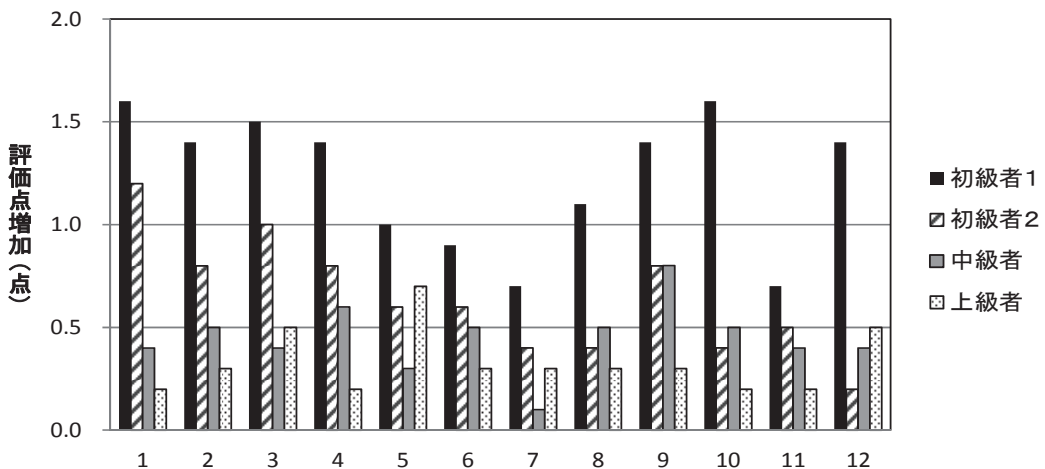


図7 音楽の授業の評価点増加

図7の結果から以下のことがわかった。

- (1) 評価点増加が1点を超える項目の数は、初級者1グループで9項目、初級者2グループで1項目であった。初級者1グループの項目数が9項目と最も多かった。中級者と上級者では評価点増加が1点を超える項目はなく、初級者1グループの増加した評価点数の値が他グループより大きくなっている。
- (2) 評価点増加が0.5点を超え1点以下の項目の数は、初級者1グループで3項目、初級者2グループで6項目、中級者グループで2項目、上級者グループで1項目であった。初級者2グループの項目数が最も多くなっている。
- (3) 評価点増加が0.5点以下の項目の数は、初級者2グループで5項目、中級者グループで

10項目、上級者グループで11項目であった。中級者グループと上級者グループの項目数が多く、中級者グループと上級者グループでは、ほとんどの項目がこの分類に属している。これらの結果を表に整理したのが、表1である。

表1 評価点増加の分布

グループ	評価点の増加		
	0.5点以下	0.5点より大で1.0点以下	1.0点より大
初級者1	なし	3項目	9項目
初級者2	5項目	6項目	1項目
中級者	10項目	2項目	なし
上級者	11項目	1項目	なし

グループ別の最も増加した評価点数をみると、初級者1グループは1.6点、初級者2グループは1.2点、中級者グループは0.8点、上級者グループは0.7点であった。初級者1グループが最も高く、初級者2グループ、中級者グループ、上級者グループとピアノ学習経験が長くなるほど、最も増加した評価点増加は少なくなっている。中級者グループと上級者グループは、音楽の授業の開講時から12の項目をすでに意識しているため、評価点増加は初級者1グループや初級者2グループに比べ、比較的少なくなっている。

グループ別の最も評価点数が増加した項目は、初級者1グループと初級者2グループは「1. 正しい音で演奏する。」、中級者グループは「9. 左右の音のバランスに気をつけて演奏する。」、上級者グループは「5. 曲の最後の部分の音の長さ、もしくは休符の長さを正しく演奏する。」であった。ピアノ学習のレベルの違いにより、評価点数が最も向上した項目が異なっていることが明らかになった。この変化は、ピアノ学習が進んでいく過程で、多くのものを習得していくが、「正しい音」→「音のバランス」→「曲の最後の部分の正確な音と休符の長さ」と意識している項目が変化していることを意味している。そして、この変化は学習により意識が向上していく流れといえるであろう。

次に、各グループの特徴を見ていく。初級者1グループでは、音楽の授業の開講時より終了時の方が評価点は高く、その評価点増加分は、初級者2グループ、中級者グループ、上級者グループに比べ多かった。初級者1グループは、本学入学前にピアノ学習経験のない学生のグループなので、ピアノ演奏に関する知識が少ない。そのため、注意項目に関する繰り返しの細やかな注意と指導により、注意項目に対する意識が高まり、ピアノ演奏に関する知識も増し、評価点が他グループに比べて大きく増加したと考えられる。初級者1グループの評価点が、すべての項目において大きく向上したことは、授業におけるピアノ演奏の指導の方針と方法がよかつ

たといえるであろう。

初級者2グループは、本学入学前から習い始めたピアノ学習経験の短い学生のグループである。ピアノ学習経験のあるグループなので、授業でピアノ指導を受けることで、以前にピアノ学習をしていた内容を思い出し、現在の学習内容を復習し、評価点の増加分が大きくなったと思われる。しかし、増加分は、初級者1グループの増加分より少ない。これは、ピアノ学習経験があるので、初級者2グループの音楽の授業の開講時の評価点が、初級者1グループの評価点より高いためである。

中級者グループと上級者グループは、音楽の授業の開講当初から12の注意項目に関する意識が高いが、授業で細やかな指導を受けることで、意識が更に向上することがわかった。これは、授業で細やかな指導を受けることで、当然のこのように無意識になっている12の注意項目への意識を刺激され、更に意識が向上したからと思われる。重要な基礎的な注意項目は、上級者や中級者は当然分かっている所以指導を省くのではなく、ポイントを押さえた指導はピアノ演奏の指導に大切であることを再認識できた。

また、4つのグループを比較してみると、図7のグラフに特徴的な2つのパターンが見られる。一つ目は、「初級者1グループの評価点増加のみが、他の3グループの評価点増加より著しく大きい」パターンである。「8. 調号を確認し、正しく演奏する。」、「9. 左右の音のバランスに気をつけて演奏する。」、「10. ト音記号、ヘ音記号を正しく演奏する。」、「12. 正しいテンポで演奏する。」の4つの項目にこのパターンがみられる。ピアノ学習経験がない初級者1グループでは、ピアノ演奏の指導によってこれらの項目を意識して演奏するようになった。しかし他の3グループはピアノ学習経験者なので、音楽の授業の開講当初からある程度これらの項目を意識しているようである。

二つ目のパターンは、「上級者と中級者の評価点増加が少なく、初級者2グループの評価点増加がやや大きく、初級者1グループの評価点増加はさらに大きい」パターンである。初級者グループの評価点増加が、上級者グループと中級者グループの評価点増加より大きくなっている。項目としては、「1. 正しい音で演奏する。」、「2. 正しいリズムで演奏する。」、「3. 正しい指使いで演奏する。」の3つの項目にこのパターンがみられる。ピアノ学習経験がない初級者1グループでは、ピアノ演奏の指導によってこれらの項目を意識して演奏するようになり、ピアノ学習経験が少ない初級者2グループでは、これらの項目をより意識して演奏するようになっている。

さらに、ピアノ学習経験の長い上級者グループが、音楽の授業のピアノ指導を受けて、どの項目を再認識したのか、どの項目は以前より十分認識していたのかを検討するために、上級者グループの評価点増加が、最小と最大の項目についてみる。

上級者グループの評価点増加が最も少なかった項目は、「1. 正しい音で演奏する。」、「4. 正しい鍵盤の位置で演奏する。」、「10. ト音記号、ヘ音記号を正しく演奏する。」、「11. 臨時記号を正しく演奏する。」の4項目で、増加した評価点は0.1点である。これらの4項目に対する

意識は、音楽の授業のピアノ指導を受ける以前から上級者グループでは十分に形成されていることが分かった。

上級者グループの最も評価点が増加した項目は、項目「5. 曲の最後の部分の音の長さ、もしくは休符の長さを正しく演奏する。」であった。増加した評価点は0.7点で、上級者グループの他の項目の評価点増加がすべて0.5点以下なのを考えると、かなり大きな値となっている。ピアノ学習経験の長い上級者グループでも曲の最後の部分を正確に演奏する意識は、ピアノ演奏の指導により再認識されている。重要な注意項目は、上級者グループにおいてもポイントを押さえたピアノ演奏の指導が重要である。また、次に評価点増加が多かったのは、項目「3. 正しい指使いで演奏する。」と「12. 正しいテンポで演奏する。」であった。増加した評価点は0.5点である。項目12に関しては、演奏する曲が難しいため、演奏のテンポが速くなる場合や、曲の中の演奏しやすい箇所と演奏しにくい箇所によって演奏のテンポが変動し、一定のテンポで演奏できない場合などがあるため、正しいテンポで演奏することを再意識したと思われる。項目12は、上級者グループにとって、大切な指導項目であることが分かった。項目3の正しい指使いは、基本ではあるが上級者グループが再認識した項目であった。これも大切な指導項目である。

4. まとめ

音楽の授業で筆者が特に意識して指導している、ピアノ演奏の際に意識しなければならない12の項目につき、音楽の授業の開講時と終了時の意識の程度を学生に評価してもらい分析検討した。これまでの検討結果から、音楽の授業を通して、学習者のピアノ演奏に関する意識がどのように変化したかに関して、以下の事が明らかになった。

- (1) 音楽の授業の開講時と終了時のグループ平均評価点は、ほとんどの項目で、初級者1グループ<初級者2グループ<中級者グループ<上級者グループであった。ピアノ学習経験が長くなるとこれらの項目に対する意識は高くなっていく。初級者よりも上級者の方が意識は高いことが確認できた。
- (2) 音楽の授業の終了時のグループ平均評価点から開講時のグループ平均評価点をひいた評価点増加は、すべて正の値であり、ピアノ演奏指導により12の項目に対する意識は向上している。
- (3) 評価点増加を、「0.5点以下」、「0.5点を超え1点以下」、「1点を超える」の3つに分類すると、初級者1グループでは「1点を超える」項目が多く、初級者2グループでは「0.5点を超え1点以下」項目が多く、中級者と上級者のグループでは「0.5点以下」項目が多くなっていた。ピアノ学習経験が短いと評価点増加が多く、ピアノ学習経験が長いと評価点増加が少なくなっている。初級者1グループと初級者2グループは、中級者グループと上級者グループに比べると、ピアノ演奏で注意すべき項目に対する意識の向上分が大きく

なっている。

- (4) 4つのグループの評価点増加を比較すると、2つの特徴的なパターンがある。一つ目は、「初級者1グループの評価点増加のみが、他の3グループの評価点増加より著しく大きい」パターンである。これは、ピアノ学習の初期の段階で意識できる項目である。二つ目のパターンは、「上級者と中級者の評価点増加が少なく、初級者2グループの評価点増加がやや大きく、初級者1グループの評価点増加はさらに大きい」であり、このパターンの項目は、ピアノ学習初期に意識し始めるが意識の定着に少し時間のかかる項目である。パターン2の項目は、初級者グループの指導に大切な項目である。
- (5) 上級者グループの評価点増加が多かった項目は、「5. 曲の最後の部分の音の長さ、もしくは休符の長さを正しく演奏する。」と「12. 正しいテンポで演奏する。」であった。これらの項目は、上級者グループの指導に大切な事項である。

ピアノ演奏の指導を行う際、今回取り扱った12の項目を繰り返し細やかに指導することで、12の項目に対する学生の意識が高くなり、その結果、完成度の高い演奏にはやく仕上がっていく。また、実際にピアノ演奏の指導をしていて気になった項目は、「3. 正しい指使いで演奏する。」である。指使いを考えることが後回しになり、自分の弾きやすい指使いになっている学生が多かった。指使いはエラーの原因にもなりかねないので、正しい指使いをしっかりと指導していきたい。12の項目を繰り返し細やかに指導する指導法により、学生の12の項目に対する意識が高まり演奏が仕上がっているため、ピアノ演奏の指導の内容と指導法は妥当であったと考えられる。今後もこの指導法を継続し、さらに指導法のレベルアップをしていきたい。

5. 今後の課題

本研究では、ピアノ演奏において意識しなければならない項目の学習効果と効率の良い学習方法を検討した。今後は、音楽の授業を学習した学生たちが、この授業で習得した意識と技術をこの先どのようにいかして演奏し成長していくのか、また、習得した意識と技術が練習方法や練習効果等に影響があるのかを検討していきたい。そして、学生たちのピアノ演奏の成長を明らかにし、それを効率のよいピアノ学習方法とより効果的な指導法に結びつけていきたい。

6. 倫理的配慮

本研究は、愛知江南短期大学研究倫理規程に基づき質問紙調査を行った。その際、口頭での説明を行い、承諾を得た。

参考文献

Barry, N.H., & Hallam, S. (2002) "Practice." *The Science & Psychology of Music Performance*, pp.151-165.